

日系アメリカ史とその文学

— 明治初期から1924年まで —

The History of Japanese Americans and Literatures

— From the early Meiji period to 1924 —

山本茂美

Shigemi YAMAMOTO

はじめに

2010年秋、あるテレビ番組で日系アメリカ人の歴史がドラマとなり五日間連続放映の大作となって日本人に紹介された。その内容は、文章や膨大な日系人の記録日記、さらには文学作品を研究し、頭の中で描いていた日系人の生活、心の中の葛藤を映像の中で見ることによって改めてこの研究の目的を確認した。

学部時代黒人問題が専門の猿谷要先生の授業、ゼミで勉強する中で私は、初めてアメリカ社会の中に排日移民法に象徴される日本人を祖先に持つ日系人に対して差別が存在していることを知った。当時日本に対してとても友好的であると考えていた合衆国の新たな一面を知り衝撃を感じた。そして合衆国の歴史を学ぶものとして、そして人種差別を学ぶものとして彼らの歴史を研究して真実を正しく日本で知ってもらいたいと考えた。それから30年近く日系アメリカ人の歴史文化、そして最近では日系アメリカ文学の研究を続けている。

今回のテレビ放映で改めて自分の研究には多くの日系人の悲劇の歴史が隠されていると考えている。その歴史的な真実を歴史的記録を

追うだけでなく日系アメリカ文学を通じて日系人の中に隠されてきた真実の思いを、そして歴史的記録にのこされなかったもう一つの歴史を研究していきたいと考えている。今後日系アメリカ人一世から現在までの日系移民の歴史を追いながら今まで研究してきた作品を織り込み一つのまとめをしたいと考えている。その為に、今回は初期移民から1924年の排日移民法通過までの時代を追いながらその時代を描いた作品を紹介していきたい。このような形で現在まで追うことができた一つ一つの作品を改めて紹介していく予定である。

ここではまず一世日系アメリカ人となった背景をさぐり、その後、歴史的な事件や法案を追いながらその中で生まれていった文学を改めて考察したい。

1 アメリカ合衆国の日系人とは

まず改めて日系人の定義について考えていきたい。日系アメリカ人は、初めてアメリカ合衆国に渡った第一世代を一世、その子供の世代を二世、三世さらに四世と呼ぶ。またこのアメリカ合衆国の日系人を考えるとき、大きくハワイと本土の二つの地域に分けられ

る。近年のアメリカの国税調査によると、日系人の特徴を「高所得」「高学歴」「低失業率」「低貧困率」が掲げられるという。そして他のアジア系の移民と違い民俗街に集まったり相互援助を行うのが少ない。

次にどのような形で日系移民になったかを考えてみたい。これについては、田中景先生の「海外移住の歴史—アメリカへ渡った日本人—」の中でつぎのように書かれている¹⁾。

日本からハワイへ — 官約労働移民 —

日本からアメリカへ本格的な移民が始まったのは、今から120年前の1885年、日本政府とハワイ政府の合意のもとに送られた官約労働移民にさかのぼります。官約労働移民とは、日本の農民がハワイの砂糖きびプランテーションで3年間のあいだ労働するというものでした。ハワイへ渡った契約労働者の大半は、広島、山口、熊本、福岡県などの中国・九州地方出身の独身の若者たちでした。当時の日本国内は、明治政府の富国強兵政策に伴って増税が実施され、余剰人口や経済不況などの問題が深刻化していました。これにより、地方農村の経済は大きな打撃を受け、多くの農民が土地を手放したり借金に苦しむという事態に追い込まれました。農村の若者たちは、家族の窮状を救うためにハワイへ出稼ぎに出たのでした。

農村のハワイ行きの要因は、経済的な理由だけではなくありません。明治政府は余剰人口問題の解決策として農村の若者に海外移民を奨励しましたが、これにより日本製品を移民地に輸出し、移民の送金による外貨獲得を目論んでいました。時の井上馨外務大臣は三井物産会長と連携して、ハワイ移民局局長であり三井物産の顧問でもあったアメリカ人、W.アーウィンに日本人労働者をハワイのプランテーションに送り込むことを提案し、両

政府間に条約が結ばれました。そして、井上外相と三井物産会長がともに山口県出身であったことから、中国地方、九州地方から移民が盛んに誘致されました。さらに1891年には、移民を募集して現地へ送り込むことを業務とする移民会社が誕生しました。

日本から、ハワイからアメリカへ — 出稼ぎ労働者 —

官約労働移民の多くは3年間の契約の後もハワイに残りましたが、日本へ帰国した人やアメリカ本土へ渡る人も大勢いました。ハワイやアメリカの親戚や友人から送られてくる手紙や帰国者の話から、現地での労働や生活の様子が村人の間に広まり、さらなる移民の波を誘発しました。アメリカへ渡った日本人は、主にカリフォルニア州やワシントン州、オレゴン州やユタ州など太平洋沿岸や西部地域に集中し、鉄道建設、鉱山、材木切り出し、農業、缶詰工場などに雇用されました。特にこれらの産業部門では、日本人は中国系移民に替わる安価な労働者として必要とされました。また日本人にとってもアメリカの労働賃金は魅力でした。1910年当時、カリフォルニア州の日系移民の平均賃金は、日本における日雇い労働者の3倍強に相当するほどでした。やがて古参の日系移民のなかから労働者請負人が登場し、日本の移民会社や汽船会社、そしてアメリカ人雇用者と契約し、日本から労働移民を調達して供給するビジネスが発達しました。こうして多くの日本人がアメリカで一儲けしようと続々と太平洋を渡り、合衆国国勢調査によると1920年には11万1010人の日本人がアメリカ本土に住むまでになったのです。

立身出世を志して — 貧乏留学生 —

カリフォルニア州やワシントン州へ渡った

日本人のなかには、出稼ぎ移民のほかに書生と呼ばれた留学生も多くいました。明治政府は西洋の先進技術や文化を吸収するため、多くの優秀な良家の子弟たちに国費を与えて欧米諸国に留学させていました。アメリカ太平洋岸地域へ渡ったのは、国費が得られず資産も乏しいが、立身出世の志や向学心に燃える若者たちでした。これらの書生の多くはかつての士族の出身で、季節労働やアメリカ人家庭で家政夫として働きながら学校に通っていました。書生たちを渡米の夢へと駆りたてたのは当時の日本で大流行していた渡米案内雑誌、今で言うところの留学ガイドブックでした。エリートとしてのプライドの高い書生たちは、やがて日系移民コミュニティーに労働者供給業、新聞社、キリスト教会などの各種事業団体を設立・経営し、日系移民社会の制度や秩序の建設にリーダーシップを発揮するようになります。

日系アメリカ人の歴史は19世紀末の移民に始まる。最初の移民たちはハワイのサトウキビとパイナップル畑の労働者として入植した。その後多数の日本人が入植した。しかし低賃金で勤勉に働き、すさまじいほどの生活力だと他のアメリカ人に強く印象づけ、更に家庭に必要なものを日本から取り寄せたためアメリカ経済に貢献しないこともあり、排日運動のきっかけを生んでしまった。

この歴史をさかのぼると江戸時代に戻ることができる。具体的な名前は記録に残っていないが、先に渡った中国人の手によって、売春婦のような形でアメリカに渡った記録があるという。1841年に土佐の漁師万次郎が漂流中にアメリカの捕鯨船に助けられてアメリカにわたりハワイからさらにマサチューセッツ州に渡りカリフォルニアで暮らし、琉球を経由して日本に戻ったという記録がある。これ

を日系人の中に入れるには疑問の残るところではあるが、アメリカの生活を長年したということでは、移民に近いかもしれない。さらに1850年浜田彦蔵が、航海中に遭難してアメリカ人に助けられてサンフランシスコに渡航、1858年日本人として初めてアメリカ市民権を取得している。ただし、彼は日に日本に戻っているのが帰民とされるべきかもしれない。このように偶然または密航により渡米した日本人の記録が少しずつあるが、注目すべきは、1869年の記録である。

旧会津藩の武器御商人だったジョン・シュネルが、旧会津藩士ら40人ほどを連れて、明治政府に無許可でカリフォルニア州ゴールドヒルに移住、茶と養蚕を目的とした「若松コロニー」を作るが、わずか二年で挫折。シュネルは逃亡、渡米した日本人は取り残され、残されたその後の人たちの記録はわずかである。

このことでわかるように最初の移民たちは生活に追われ、文学作品を書く時間も心のゆとりもなかったようである。

2 初期移民に対する日系文学

先に述べたように、このころの日系アメリカ文学を探するのは困難である。さらに彼らはまだ英語をうまく扱うことができなかったので、わずかにあるものは、俳句や短歌である。そこで、ここではこの会津藩について日系二世ヨシコ・ウチダが描いた作品について述べていきたい。

ヨシコ・ウチダについては2003年の金城学院大学論集44号で述べているがここで改めて簡単に作者の紹介をしたい²⁾。

1992年6月21日に71歳の生涯を終えたヨシコ・ウチダは、29冊の児童文学作品と4つの純文学を書いた。ヨシコの父は、同志社大学を卒業後エール大学に進学し、医者になるた

め3年間のハワイでの日本語教師生活を経て1903年シアトルに渡った。その後、成功した日本人M.・フルヤのもとで雑貨商の仕事に就いた、その後1917年に三井商事の社員としてサンフランシスコに移り、日本から渡航した榎田郁子と結婚した。

ヨシコの家族は、三井物産の副支店長になった父に連れられてパークレイに移住したが、当時日本人がほとんど居住していなかったので、他の日系人と違い白人社会に同化したいと思う気持ちはかなり強かったという。一方、キリスト教の精神が強い両親が、勢力的に日本からの留学生の世話をしたり、白人の援助をしたりする姿から、ヨシコに他人に対する分け隔てのない愛を自然に伝えられていたと考えられる。しかし、彼女が生きてきた環境は、決して暮らしやすいものではなく、常に白人の差別の目にさらされていたという。彼女は、常に白人より劣っているという意識にさいなまれて生きていた。プールに入るにも、髪を切るにも、自分を受け入れてもらえるかを、いちいち確認しなければならない生活。その中で、できるだけ白人と話をしないという、生きるための道を選び、高校では、できるだけ多くの単位を1年で取り、16歳でカリフォルニア大学に入学した。

その後、第二次世界大戦のきっかけとなった真珠湾攻撃を境に、強制収容所に入れられ苦しい生活を強いられるのである。ヨシコは収容所の中の学校の教師として、不自由な生活の中でも姉とともに前向きな生き方を続け、この間の体験をいくつかの児童文学作品にした。また、自らの体験を語ったのが、先に紹介した『荒野に追われた人々』である。これらの作品については、次に考察するが、このように作家活動を始めたのは、1943年に収容所を出て、東部の名門女子大スミス・カレッジに入学したあとのことである。大学院

では教育学を学び、フィラデルフィアでは、初めての日系人の小学校の教師となった。しかし、小学校の教師として一日中張り詰めた生活を余儀なくされ、このことに疲れたヨシコはニューヨークに移り住んだ。ここで作家としての修業を始めたが、そのころコロンビア大学に講師として招かれていたハーコートプレイスの編集者Margaret Mc Elderryと出会い、まず日本民話を英訳した*The Dancing Kettle*を出版した。1994年のことである。1952年にはフォード財団の研究者として日本に留学しここで、今まで付き合ったことのない親戚や友人と顔なじみになった。

明治生まれの両親に日本のことを教えられていたヨシコは、同世代の日本人よりはるかに日本の伝統や価値観を身に付けていたことを知った。それとともに、日本の美術や工芸作品に触れ、夢中になり、日本の民芸運動の創始者達の禅に根ざした哲学がヨシコの心を豊かにした。強制収容での体験は、ヨシコにとっては、受身であるために力を使い果たしてしまうものだったのに対して、この体験は、日本人を先祖に持つ自分に誇りを持つ自覚を芽生えさせたきっかけだったと、後に述べている。

日本での留学中に集めた民話や体験が、*The Magic Listening Cap*や、その他のいくつかの物語を書くことになる。彼女は、大人向けの短編もいくつか書いたがなかなか、出版社に認められず、児童文学作品を中心に活動を進めた。しかし、日系人の強制収容の過ちに対する補償運動がはじまり、今まで沈黙を守ってきた日系一世や二世が自分たちの経験を語り始め、さらに多民族多元文化主義の始まりも後押しして、彼女の作品が注目されるようになった。

このヨシコ・ウチダが会津からの移民を調査して書いたのが次の作品である。

『ゴールドヒルのサムライ 松坂源之助』

この作品は、日本の徳川幕府が倒れた1869年に、会津若松からひそかに合衆国に渡った人々の物語である。最後まで政府軍と戦った会津藩の武士、松坂源之助を中心にした一行だった。日本に失望した源之助は、息子の考市と、日本にきたオランダ人で会津藩の軍事顧問として仕えていたスネール一家、さらに何人かの農夫やスネール家の女中であるおけい、らとともに日本を出発したのであった。横浜からの船には、蚕や樹木を積み込み異国の地で新たな農業や産業に挑戦するつもりであった。

しかし、合衆国の地に着いたとき、現実には、日本で聞かされていたものとは大きく違うことを知る。さらに蚕の全滅など、いくつかの計画がだめになり、最悪の条件のなかで一行は力を合わせて生きていく。そんな彼らを助けてくれる白人もいた。食べ物を与えてくれたり励ましてくれたりという、温かい心のふれあいがこの作品には込められている。一方、日本人の存在を疎ましく思う白人の荒くれ者が、考市たちを執拗に追いまわし、やがてせっかく耕した畑につながる川をせきとめ、畑を使えなくしてしまう。インディアンも話の中に登場するが、やはり、白人に迫害される姿が多く描かれている。

この作品は、日本からの初期の移民の歴史的事実に基づいて書かれたものである。そして、幸せな結末を迎えることなく、失望の中で、たった二人残された考市と父源之助が新たな地を求めて旅立つところでこの作品は終わっている。この作品がどのようにアメリカの子供たちに紹介されたかはわからないが、日系人のルーツを紹介する貴重な資料となったことは明らかだ。

作品の最後には、次のようなヨシコ・ウチダによるあとがきが残されている。「若松コ

ロニーの人たちの後、日本からカリフォルニア州に開拓者として人々がやってきました。彼ら日本からの開拓者たちの努力が、カリフォルニア州を現在の緑あふれる農園に適した土地にかえるのに、多大な貢献をしたのです。」

このようにヨシコ・ウチダは、自分の先祖に対する尊敬と感謝の気持ちでこの作品を書いたのだ。

3 写真花嫁の問題

日系移民の定住に伴い、男性ばかりの社会に花嫁を迎える必要が出てきた。そのために始まったのが写真花嫁である。地元カリフォルニアをはじめ多くの州では、アジア系の男性と白人女性の結婚が法律によって禁止されていた。さらに日米間の往復旅費は高く、さらに花嫁の支度金や渡航費も用意しなければならなかったため、自分で日本に戻って花嫁が見つけれられるのはわずかだった。そこで考えられたのが写真花嫁だったのである。これは、アメリカの日系男性と日本の女性が仲人の紹介で太平洋を渡り写真や手紙を交換して結婚を決めるというものだった。縁談がまると、花婿がアメリカにいるまま日本で戸籍上の手続きと披露宴が行われ、花嫁はその後6か月間を夫の実家で過ごした後にアメリカへ渡った。

しかしたった一枚の写真を、しかもずっと若い時の写真や他人の写真を送り、多くの嘘を書きならべた身上書だけを頼りに渡米した女性たちは、港で夫にあったとたん絶望したりあきらめて暮すなど多くの悲劇を生みだした。この姿は白人にとって異様なものであり非民主的であった。そこで日系人に対する非難の目が向けられるようになっていった。さらに多くの子供を産む日系人社会はいずれ西海岸が黄色に染まるのではないかという不

安からやがて排日運動となって日系人を排除しようとし始めた。このころの様子を描いた作品については金城学院大学論文集人文科学編第2巻2号の中で述べている。

ここでは写真花嫁が登場する作品について少し紹介したい³⁾。

写真花嫁が登場する作品について

日系三世デイヴィット・ムラ (David Mura) の作品の中には日系一世の祖父母をテーマにした作品がある。この中には、なぜ祖父母がアメリカに渡ったのかが書かれており、その中で登場する祖母は「写真花嫁」であったと語っている。また、日系二世のワカコ・ヤマウチ (Wakako Yamauchi) の両親は、静岡県静岡市の出身であるが、家業のかまぼ屋を継ぎたくなかった父親が渡米し、その父のもとに写真花嫁として嫁いだ母について描かれている。しかしこのテーマの作品はあまり見られない。それはおそらく「写真花嫁」がアメリカ社会でいい印象を持たれていないからであろう。先の論文の中で、あえてこのテーマで書かれた作品を比較研究している。この作品はヨシコ・ウチダの書いた『写真花嫁』 (Picture Bride) とカヨ・ハッタの『写真花嫁』である。ヨシコ・ウチダの作品は、アメリカ本土のものであり、カヨ・ハッタの作品はハワイのサトウキビ畑が舞台でこの作品は映画化されている。

ヨシコ・ウチダの『写真花嫁』は、The New York Public Library による1988年度10代児童書300選に選ばれている。カヨ・ハッタの作品は日本人の女優が主演を務め日本でも多くの反響を得た作品である。ここでは、先に述べた論文の中からそれぞれの作品の結婚までのいきさつだけ注目したい。

ヨシコ・ウチダの作品のハナは21歳で夫太郎は31歳だった。当時の日本の結婚を考える

と結婚適齢期である。年齢差も日本社会ではよくみられたはずである。太郎はアメリカ社会で苦勞しているのだから見えたが一応夫婦として結婚生活がスタートしている。しかしハナの若さは、ヤマカという太郎の友人の恋心に火をつけ精神的に深い愛情を抱きあうようになる。理性の保たれた恋愛ではあったが、ヤマカがインフルエンザにかかるとかれの看病に身重にもかかわらず駆けつけその後階段から落ち子供を死産してしまう。この作品の中でいかに写真花嫁が悲劇の結婚であり本当に付き合うことによる恋がどれほどハナにとって大切であったかを暗にほめかしていると考える。ヨシコ・ウチダは、ヤマカを登場させることで写真花嫁の悲劇を表現していると考えられる。

一方、カヨ・ハッタの作品の主人公リヨは16歳。夫マツジは43歳である。自分の父親とほとんど違わないマツジを夫にすることになるが、リヨに届けられた写真は若い時のもので、リヨは自分をだましてアメリカに呼び寄せたことを長い間許せないでいる。そこで自分でお金を貯めて日本に帰ろうとする。マツジは何も言えずこの姿を見守っていく。リヨが帰りが遅い時や周りの人にいじめられた時マツジは、黙ってリヨを守っていく。家庭に恵まれず渡米したリヨにとって亡くなった父のような優しさをやがて受け入れていく。

このような写真花嫁は実際にも多くみられる。この作品では、悲劇の写真花嫁が多くの苦しみや悲しみを乗り越え自らの運命を受け入れやがて幸せになるという設定である。先品に触れる人々に歴史的事実を知ってもらうだけでなく強くたくましく生きていく女性の姿を表現しているのである。

4 1924年排日移民法通過前後の日系人の歴史

写真花嫁が引き金になって激しさを増した排日運動に日本政府も危機を感じるようになった。そこで日米で交わされたのが1908年の「紳士協定」である。この協定により日本は在米日本人家族、結婚による渡航旅行者を除いて渡米できなくなった。しかし、結婚の渡米が禁止されなかったため抜け道を活用し写真花嫁が減ることはなかった。さらに単純労働者から脱却し定住を図りたかった日系人に対する警戒心が高まり、日系人の土地利用への制限を設けようとした。1913年カリフォルニア州はいわゆる外国人土地法を成立させた。その中で移民、帰化法でいう「帰化不能外国人」の土地所有が禁止される。そこで米国で生まれた自分の子供（市民権を所有している）に土地を所有させ、自分達は後見人としてさらに子供から土地を借りるという土地利用法を考えていった。先にも述べたように日系人はたくさんの子供を産むことからこの点においても日系人にアメリカ本土を侵略されるのではないかと恐れられるようになった。こうして1920年には米国全土で約12万、カリフォルニアでは7万（州人口の2パーセント）の日系人が生活していたという。

日本政府は、1918年にパリ講和会議で人種差別撤廃法案を提案し、過半数の国々から賛成を得たが、ウィルソン大統領の反対により可決しなかった。1921年、米国連邦会は移民割当法と称される法案を成立させていた。この法案では、1910年国税調査における各国別生まれの移住者を算出、以後の移民はその割り当てに比例した数でのみ認められることになっていた。しかし、1910年に基準を置くと、南欧、東欧系に有利だと不満の声が上がった。そこで南欧、北欧系の移民が少なかった1890年に後退させる改正案が急浮上した。1924年の移民・帰化法改正はこのような理由

で下院を通過した。この時点では排日とはされていない。1890年に基準を合わせれば日本の移民割当は年間146人となるはずだったからだ。しかしカリフォルニア州出身の下院議員によって「帰化不能外国人の移民全面禁止」という第13条c項が追加された。帰化不能な人種で移民していたのは大部分が日本人であり、強い排日運動を感じさせるものである。下院で通過した法案は、地域関係に利害関係の少ない上院で法案は通過しないと米連邦政府もワシントンの日本大使館も考えていたが、日本からの移民がやがて米連邦の政府でコントロールできなくなる紳士協定の、日本政府の自主規制に疑問点が問題化され、予想に反して通過してしまった。この法案成立により日本は大きな移民先を失った。

この時代に書かれたのがエツ・スギモトの『武士の娘』(*A daughter of the Samurai*, 1925年)である。武士の娘として生まれ、法定的日本の上層階級の一員であったスギモトは、英語と西洋文化という幅広い教養を身につける。この本は二人の母、つまり日本とアメリカに捧げられているという。

作者スギモトは、アメリカを進歩と近代性の縮図と称賛する一方で、日本の近代化には残念に感じていたようである。彼女の個人的な物語はロマンティックな日本の伝説やおとぎ話、さらには伝統的な習慣や祭りなどを抒情あふれた形で描いている。まだ日本を離れて間もない日系人社会の中で生まれた作品であることがよくわかる作品である。この作品の中で日本の名誉をけなしてはいけないと、官人貴族的感覚や外交的使命の自覚が日本やアメリカ社会に対して厳しい表現をさけたものになっている。

また彼女の娘が妹が生まれた時、金髪でなかったことをがっかりするという表現は、当

時の差別に苦しむ日系人の苦しい立場をさりげなく表現していると考え。

この作品をアメリカ人の評論家は、「古き時代の日本娘の魅力的な物語」として歓迎している。日本への弁明でありアメリカへの賛美の作品ととらえられているという。この時代はまだ第二次世界大戦前で差別は存在したが戦争に発展していない時期なので、このように受け入れられたのかもしれない。しかし、この後日系人が強制収容所に入れられ、さらに苦難の道に日系人は進んでいく。

第二部では、第二次世界大戦前後の日系人の歴史とその時期に書かれた作品、さらにその当時の内容をテーマにした作品をまとめていきたい。

終わりに

長い間取り組んできた日系アメリカ人の歴史研究と日系アメリカ文学研究を一つにまとめたいと考えたのは二年前である。日系アメリカ史研究でさえ幅広く把握しきれないことが多いその研究に文学を組み込むのは、簡単なことではない。しかし、修士論文作成時に知った多くの日系二世三世の文学を通じて、改めてこの文学作品の中に隠された日系人たちの声を受けとめ、研究する必要を痛感したことを思い出し、今回まず初期の内容をまとめることにした。

まだ全作品研究を組み入れることはできていないが、最初に述べたように、今までに大まかに現代までの日系アメリカ人の歴史と文学を追って研究してきた。更に昨年、ハワイとアメリカ本土の文学作品の動機の違いや各世代の作品の違いなどを研究した。日系アメリカ文学作品の詳しい研究に時間をつぎ込んでいるが今後今まで研究した作品、更には新しい作品を含めさらに詳しい研究をしていきたい。

注

- 1) 田中景, 『20世紀初頭の日本・カリフォルニア『写真花嫁』修業—日本人移民女性のジェンダーとクラスの形成, 社会科学, 同志社大学人文科学研究, インターネット上のこの論文の中の記事より。
- 2) 山本茂美, 「ある日系アメリカ文学者のメッセージ—ヨシコ・ウチダの作品を通じて—」, 金城学院大学「2006年3月論集(英米文学編)第44号, pp336-339。
- 3) 山本茂美『写真花嫁』にみる日系アメリカ人一世の生き方について」, 金城学院大学論集, 人文科学編, 第2巻2号, 2003年3月, pp164-165。

Work Cited

- 1 エレイン・キム, アジア系アメリカ文学, テンプル大学, 1982年。
- 2 山本茂美, 「ある日系アメリカ文学者のメッセージ—ヨシコ・ウチダの作品を通じて—」, 金城学院大学論集(英米文学編)第44号, 2003年3月。
- 3 山本茂美, 「『写真花嫁』にみる日系アメリカ人一世の生き方について」, 金城学院大学論集, 人文科学編, 第2巻2号, 2006年3月。
- 4 田中景, 「海外移住の歴史—アメリカへ渡った日本人—」, 県立新潟女子短期大学紀要。

Work Consulted

- 1 佐藤清人, 「写真花嫁」と『写真花嫁』—事実と虚構の間で, 山形大学紀要, 第15巻第2号
- 2 田中 景, 「20世紀初頭の日本・カリフォルニア『写真花嫁』修業—日本人移民女性のジェンダーとクラスの形成, 社会科学, 同志社大学人文科学研究。
- 1 藤沢全, 「日系文学研究」, 大学教育社, 1985, 東京。
- 2 上坂冬子, 「ユタ日報のおばあちゃん, 寺澤国子」, 瑞雲舎, 2004, 東京。
- 3 黒川省三, 『アメリカの日系人』, 教育社, 東京, 1979。
- 4 鶴田真, 『日系アメリカ人』, 講談社現代新書, 東京, 1971。
- 5 村上由見子, 『アジア系アメリカ人』, 中央公論社, 1971。

- 6 若槻康雄, 『排日の歴史』, 中央公論社, 東京, 1971
- 7 羅府新報, 1946年-1947年, マイクロフィルム, 国会図書館。